

八王子遺跡

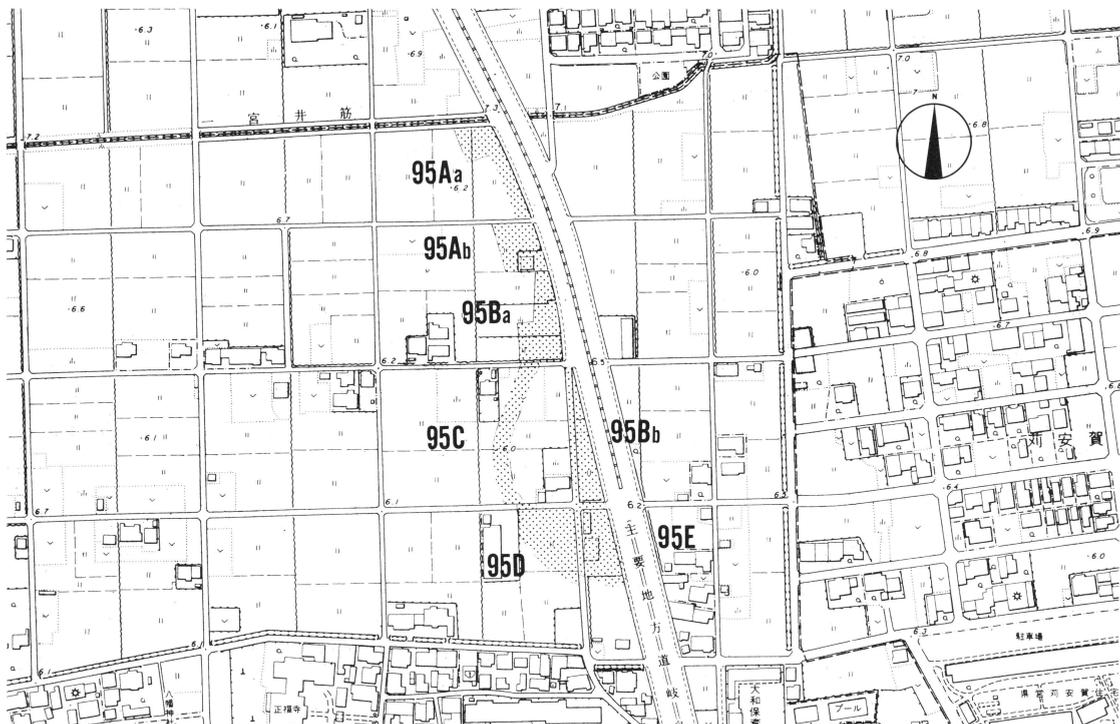
調査の経緯 八王子遺跡は、一宮市大和町荏安賀に所在し、木曾川水系日光川上流域に形成された標高5～6m前後の自然堤防及び後背湿地に広がりが認められる遺跡である。

今回の発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として本年4月より実施している。本年度は、西尾張中央道西側のA区～E区までの8,734㎡を発掘調査した。

調査の概要 八王子遺跡は、従来弥生時代の遺物散布地として知られており、調査区の南西約2kmには弥生時代後期の標式遺跡として有名な山中遺跡がある。本年度の調査では、弥生時代の環濠・竪穴住居・方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居群、奈良時代の土坑墓・井戸・区画溝・掘立柱建物、鎌倉・室町時代の区画溝・井戸などを検出した。その結果、八王子遺跡は単に弥生時代だけにとどまらず、弥生時代前期から鎌倉・室町時代にかけて連続とつづく複合遺跡であることがわかってきた。

なかでもA a区の弥生時代中期の二重環濠、A b区の弥生時代前期の環濠及びB a区の谷地形の発見により、A a区～B a区を東端とした弥生時代の集落の存在とA b区、B b区及びC区の古墳時代前期の集落の存在が確認されたことが大きな成果といえる。またA a区の弥生時代前・中期の方形周溝墓、A b区の弥生時代中期の方形周溝墓など墓域の確認及びA a区の弥生時代前期の石器製作土坑など、遺跡の性格を考えていくうえで重要な発見も多かった。

(黒田哲生)



第1図 調査区位置図(1:5000)

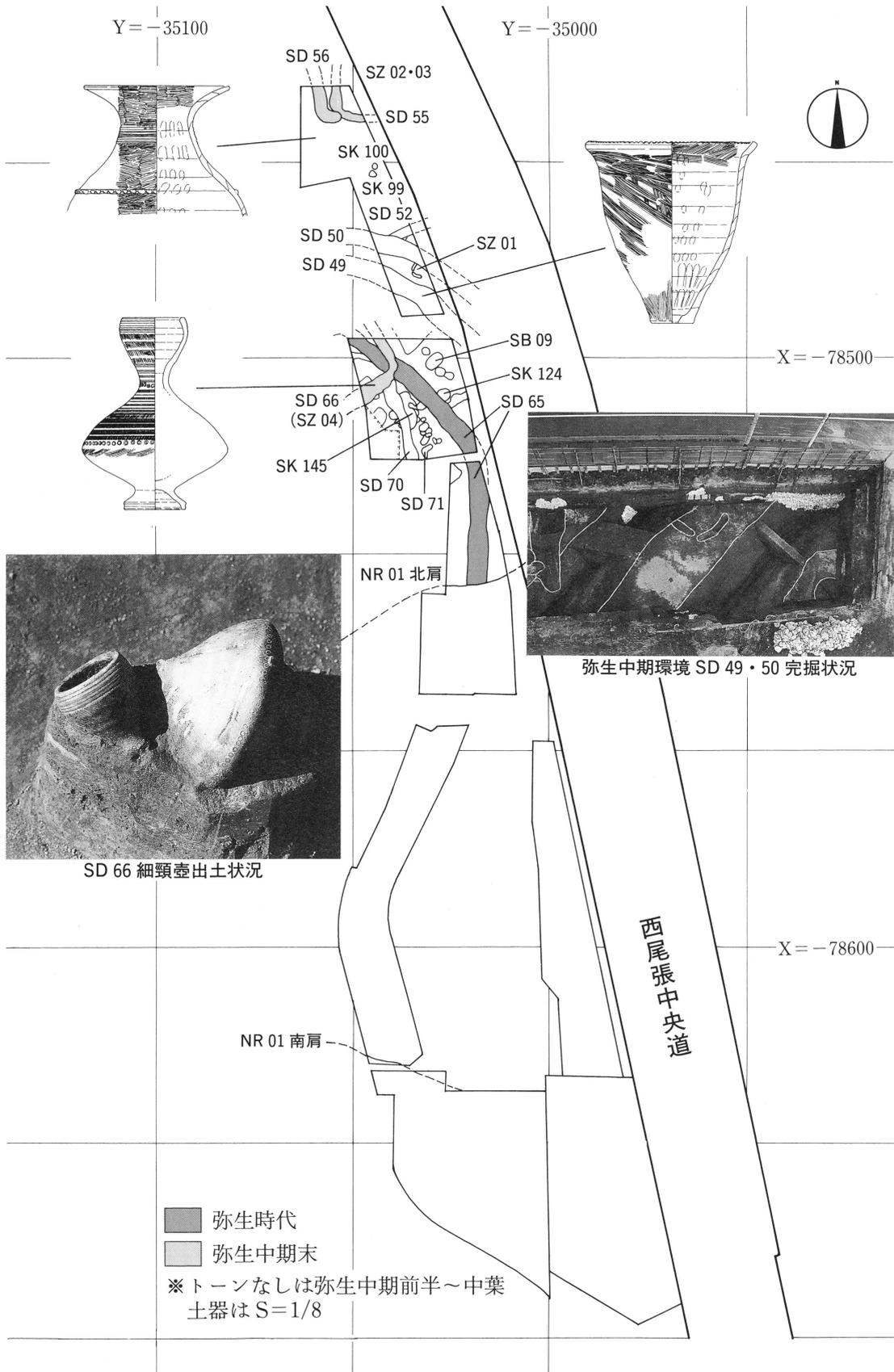
時期区分 八王子遺跡は前述のように弥生時代前期から鎌倉・室町時代までほぼ途切れることなく継続している。そこで、この年報では遺構検出面などから弥生前期～中期、弥生後期～古墳後期、奈良～鎌倉・室町時代に分けて記述を進めて行くこととしたい。

弥生前期～弥生中期 弥生時代前～中期は現在のところ、A a・A b・B aの三調査区で遺構を検出している。

まず弥生前期の遺構としては、A b区でわずかに北にふくらむ弧を描きつつ調査区の北西隅から南東隅にかけて伸びる溝S D65を検出した。この溝の規模は幅約4 m、深さ約1.2 mで、さらにB a区へと続いている。この溝は規模や方向性などから環濠と考えられ、溝の西側に居住域が展開していたと想定できる。B a区の南半部からB b・C区にかけて幅約110mもの自然流路N R01が徐々に埋没しつつも古墳前期まで機能していたため、S D65の南端はN R01に接続して収束するものと考えられる。環濠内は調査面積が狭いことや弥生中期の遺構により破壊されていることなどから竪穴住居などの明確な遺構は検出できなかった。環濠外ではS Z01やS D52、S K99・100などの遺構がある。うち、S Z01は四隅が切れるタイプの方形周溝墓で中期の環濠に破壊されている。一辺の長さは約3 mときわめて小型である。S K99・100からは千点をこえる大量の下呂石のフレイクやチップが石鏃の完成品などとともに集中して出土しており、石器製作の際に出た石屑を捨てた土坑と考えられる。

弥生中期前半には居住域が拡大し、A a区南端付近にS D49・50の2条の環濠が掘削される。いずれも規模は幅約5 m、深さ約1.5 mで、断面はV字形を呈する。これらの環濠の方向性は前期の環濠S D65とほぼ一致している。S D65はなかば埋没しつつも依然として機能していたが、環濠としての意味はすでに失っていたと思われる。居住域にあたるA b区では竪穴住居S B09を始めとして溝・土坑・柱穴など数多くの遺構が複雑に重複して検出された。内環濠S D49やS D65上層・70・71、S K124・140・145などからは朝日から貝田町期に属する比較的まとまった量の土器・石器群が出土しており、なかでもS D65上層・S K145から玉作りに用いた可能性をもつ溝のある砥石2点が出土したことは特筆される。S D65上層およびそれ以西の遺構群は焼土や炭化物を大量に含む土で人工的に埋め立てられた状況を示していることから、中期中葉頃にこの集落は何らかの事情により、広範囲にわたって焼失し、その後に大規模な整地が行われた可能性が高い。環濠S D49・50付近で数多くの石鏃が集中的に出土していることから、集落間の争いにより罹災したことも考えられる。

弥生中期末にはA a・A b区の性格が一変する。環濠がすべて埋没し、方形周溝墓が築かれるようになる。S D55・56・66はいずれも方形周溝墓の周溝である。うち、前二者はS D56を掘削したのち、比較的短期間にS D55を掘って西側へ拡張している。S D56・66から高蔵期の良好な資料が出土している。なかでもS D66から出土した、内部にベンガラを充填した細頸壺が注目される。また、B a区で方形の平面とすり鉢状の断面を呈する土坑S K40から高蔵期の最終末に属する土器群が出土している。 (樋上 昇)



第2図 八王子遺跡弥生前~中期遺構図 (1:1500)

弥生後期
～古墳後期 B (B a・B b)・C区で、八王子遺跡をほぼ東西に横切る自然流路N R01を検出した。規模は幅約110m測る。底部は湧水のため確認できなかった。この土層中から山中期に属する土器が出土していることから、N R01は弥生後期まで、ある程度活発な流水活動を繰り返していたと見られる。古墳前期初頭頃(廻間I式期)には、N R01の流水は止まり、「浅谷」へと規模を縮小させている。古墳中期前半頃(松河戸期)までは湿地状の様相を呈しており、この時期の終わり頃にはこの谷は洪水によってもたらされた中粒砂によって覆われ、完全に埋没したのである。

このため弥生後期はB b・C区の大部分はN R01の中に当たり、その北側のA b区では南北に走る溝S D60を検出したのみで、全体に遺構は希薄である。

古墳前期初頭(廻間I式期)の遺構は、N R01の北側のA a・A b区で主に見られた。これらの調査区では竪穴住居5棟の他、土坑・溝を多数検出した。とりわけA b区のS K73からは当該期でも最も古い段階に属す多量の土器が、一括投棄されたような形で出土した。そして前期中頃(廻間II～III式期)になると、「浅谷」化したN R01の南側にあたるB b・C区の広い範囲で遺構が展開していく。2つの調査区で確認した竪穴住居は20数棟で、さらに南のD・E区へと広がっている。C区のS K16・93からはこの時期の遺物が多量に出土した。

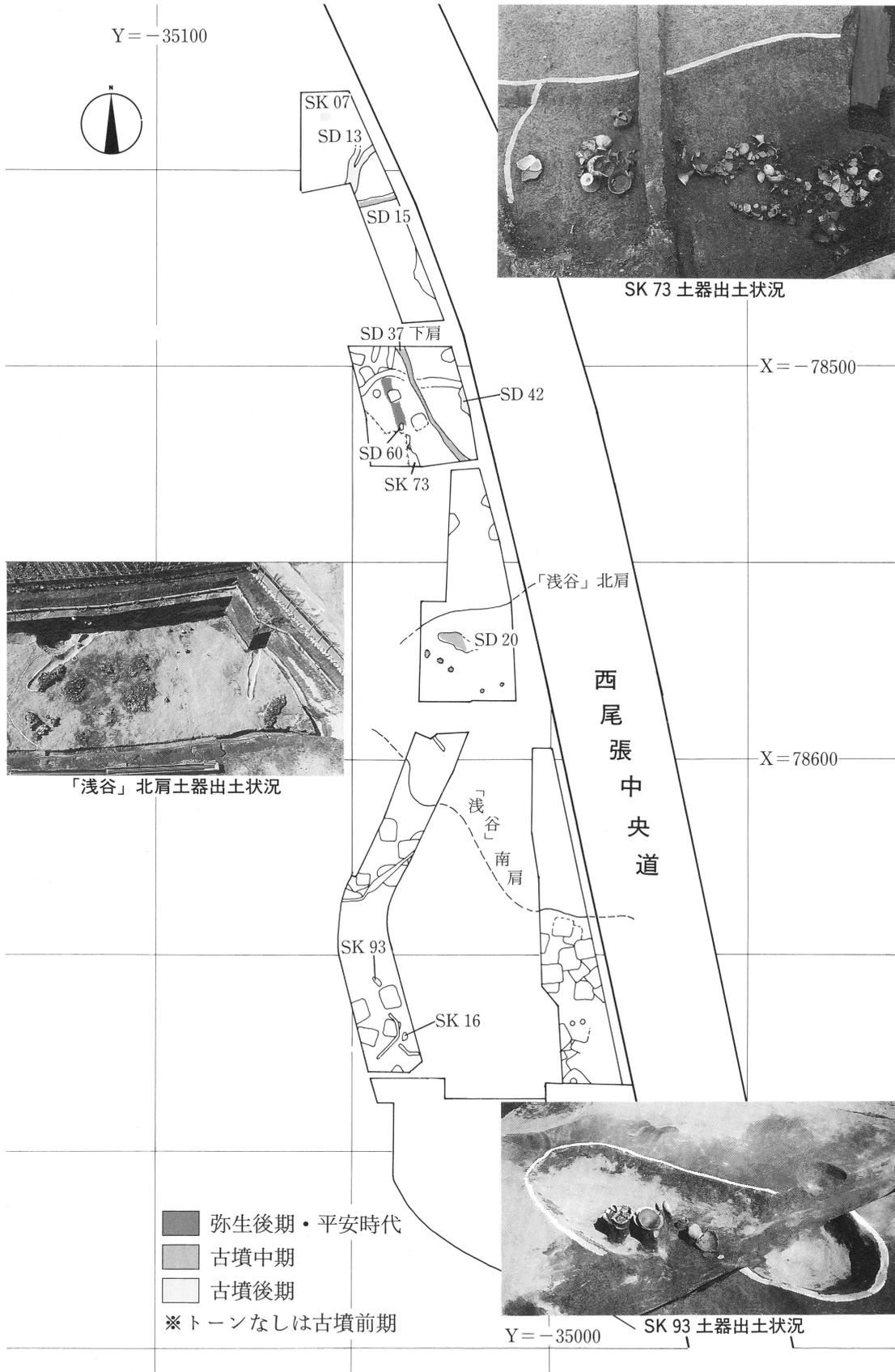
これらのことから古墳前期初頭まではN R01の北側が主な居住域であり、南側に遺構が少ないのは、居住地としての環境がまだ整っていなかったためであろう。その後、前期中頃からはN R01の南側へ居住域が移ったことが予想され、代わって北側ではこの時期から遺構の数が減少する傾向がうかがえる。

「浅谷」化したN R01の南側は、出土した土器から、古墳中期初頭(松河戸I式期)までは居住域であったと考えられるが、全体的にはこの時期の遺構の数はさほど多くない。A a区のS D15からは宇田式を中心とする土器群が出土した。またA b区のS D37下層からは滑石製の勾玉模造品と有孔円板が出土した。周辺で祭祀的な行為が行われた可能性を考えても良かろう。B a区ではN R01が完全に埋没する直前の時期の土坑数基と、それが埋没した後に掘削された溝S D20を検出した。この遺構からも比較的まとまった土器群が出土している。

古墳後期になっても遺構の展開の様相は、中期とあまり変わらない。A b区のS D42はこの時期の溝であるが、出土遺物からかつてこの付近に存在した蛇塚古墳の周溝の一部である可能性が考えられる。A a区では、S D13、S K07を検出した。

古墳中期から後期にわたる時期は遺構の展開は散発的で、前期の居住域が継続していたことを示す積極的な状況はあまり見られない。むしろ蛇塚古墳が築かれるようになったということから、非日常的な場へと変わっていったとも考えられる。そしてこのような変化をもたらしたのは、N R01が完全に埋没したことと何か関係があるのかもしれない。

(山本寿徳・飴谷 一)



第3図 八王子遺跡彌生後期～古墳後期遺構図 (1:1500)

奈良時代
～室町時代

奈良時代の遺構としては、A b区とB a区から掘立柱建物2棟を検出した。A b区のS B10は、調査区の北東隅に北でやや西に振れる方向性を持つ柱穴4つが確認されたが、未調査部分の北ないし東にも遺構は展開していくと思われるため、庇付か総柱建物になると思われる。柱の掘形は1辺1mを超え、直径は20～22cmである。柱間の寸法は桁行が8尺(2.4m)で梁間が6尺(1.8m)と大型の建物である。B a区のS B01は2間×2間以上の東西棟建物で、西側は調査区外に続いている。方位はS B10と異なり北でやや東に振れている。柱の掘形は1辺0.5～1mで、柱の直径は16～18cm、柱間寸法は6尺等間とS B10より小型である。東側には2間分の塀が平行して検出されている。B a区の南側では、同時代の溝S D03を検出した。溝の中からは、円面硯の破片のほか、多量の須恵器が出土したほか、溝の西の長円形の掘り込みの中から、2段重ねの方形の曲物が出土した。さらに、この溝の中から6基の土坑墓を検出した。それらは、概ね長径130～180cm、短径80～120cmの長円形を呈していた。埋土の状況は、上層はシルト質細粒砂、下層は粘土質シルトがブロック状に混在しており、中世の土坑墓と類似の様相を示していた。中からは、須恵器の杯蓋、杯身の完形品が数点出土しており、それらの遺物より、土坑墓は8世紀頃のものと考えられる。C区では、北東から南西方向に伸びる3条の溝と、それとほぼ直角に交わる1条の溝が検出された。これらの溝からは、杯・杯蓋・甕など奈良時代中期の須恵器が出土した。また、溝で囲まれた内側からは、表面に縄目、裏面に荒い布目が施された平瓦片数点が出土した。これらの遺構や遺物、あるいは八王子遺跡から西へ約600mくらいの所に同じ時代の薬師堂廃寺があることから、この辺りに古代寺院跡のような遺構を想定することができるかもしれない。

鎌倉・室町時代の特筆すべき遺構は、A区、B区で検出された方形居館跡である。その区画溝は、ほぼ東西・南北の方向性を持っている。A a区からB a区にかけては、4つの方形居館が南北にほぼ50mの間隔で連続して展開しており、区画溝は外側のものは幅が広く、内側のものは狭いという特色を有していた。また、溝の状況から複数の作り替えがあったことが伺われた。居館内からはそれぞれ井戸が検出された。A b区の井戸では曲物が、B a区の井戸では木組みと曲物を伴っていた。また、溝や井戸の中からは灰釉系陶器が大量に出土した。このA a区の居館内からは、区画溝とは異なる北西・南東の方向性を持った溝も検出された。この方向性は、前述した奈良・平安期の遺構の方向性とほぼ一致しており、この時期の古い遺構は、奈良・平安期の遺構の影響を受けているものと思われる。B b区の方形居館跡は、1辺が25～30m程度の大きさで、3か所想定された。区画溝内からは、12世紀後半から13世紀前半にかけての灰釉系陶器が大量に出土した。また、S D11の上層からは、13世紀後半の灰釉系陶器や、常滑焼の甕・鉢などが大量に出土した。これらのことより、B b区の方形居館跡は、12世紀末から13世紀にかけて展開していたものと考えられる。

以上の点から、鎌倉・室町期にはこの地は屋敷地として機能していたと考えられる。

(増澤 徹)



第4図 八王子遺跡奈良～室町時代遺構図 (1:1500)

まとめ

A b区からB a区にかけて弥生前期の環濠を1条検出した。環濠外には方形周溝墓1基、石器の剥片を廃棄した土坑2基がある。B a区南半部からC区にかけて幅約110mの巨大な自然流路NR01があり、弥生前期から中期中葉の居住域はこのNR01の北に展開している。弥生中期前半には居住域が拡大してA a区に2条の環濠が掘削される。環濠内のA b区では竪穴住居・溝・土坑・柱穴が複雑に重複して見つかった。これらの遺構の埋土には焼土・炭化物が大量に含まれていることから、中期中葉頃には比較的広範囲にわたって火災があり、そのあとに人為的な整地が行われていることが判明した。環濠周辺に多量の石鏃が集中して出土することから争いが火災の原因である可能性も考えられるが、被災した範囲が集落の全域におよぶのか否かは調査面積の制約のため不明である。集落の焼失後、弥生中期末には墓域に変化しており、A区で造りかえを含む3基の方形周溝墓を検出した。弥生後期は遺構が全体に希薄で、A b区で南北方向の溝を1条検出しているに過ぎない。また、この頃からNR01が急速に埋没し始めることがわかっている。

古墳前期初頭にはA b区で小規模な竪穴住居が5棟みつかり、再びこの地に居住域が展開する。前期中頃にはB b・C区でNR01が埋没し、両調査区の北端部からB a区南半部に「浅谷」が残るようになる。この時期の居住域の中心は微高地化したB b・C区南半部に移り、20数棟の竪穴住居が検出されている。古墳中期は再び遺構が希薄になり、A区では2条の溝(S D15・37下層)があるのみである。B a区には湿地化した「浅谷」内に数基の小土坑が掘削され、その直後の洪水による中粒砂の堆積によって完全に浅谷が埋没し、さらにその砂層の上からS D20が掘り込まれている。S D37下層からは滑石製の勾玉模造品と有孔円板が出土している。古墳後期も依然として遺構は少ないが、A b区のS D42は明治17年の地籍図にみられる蛇塚古墳の周溝である可能性が高い。

奈良・平安時代にはA b・B・C区で遺構を確認している。A b区とB a区北半部では方位の異なる2棟の掘立柱建物を検出した。特にA b区のS B10は柱掘形が1mを超える大型建物であり、その性格が注目される。B a区南半部には東西溝S D03がある。この溝の中には5基の土坑墓と長楕円形の土坑2基が溝底から掘り込まれており、この時期の墓制を考えるうえで貴重な資料といえよう。B b区とC区ではL字に直交する数条の溝を検出した。中からは平瓦が数点出土していることから、寺院の区画溝の可能性も考えられる。

鎌倉・室町時代はすべての調査区で屋敷地を方形に区画する溝と井戸を多数検出した。また、B a区の南半部には奈良時代の墓域と重複して方形土坑墓群が展開している。低湿なNR01の上にあえて築いている点はこの時期の一般的な墓域の立地と共通している。

以上、八王子遺跡の概略を簡単にまとめてきた。時期幅が広く、内容も多岐にわたっている。なかでも弥生前期と中期の環濠が同一の集落で検出されている例は県内でもきわめてまれである。また、盛衰はあるが古墳前期まで集落が継続していく例も珍しい。遺跡の範囲確定、水田を含む生産域や弥生中期末～後期・古墳中～後期の居住域の確認、奈良・平安時代の遺構の性格など今後の課題は来年度の調査を通じて解明していきたい。

(樋上 昇)